

4

問われている私たち自体の生き方

平成24年9月、中央教化研究会議を「3・11後の『立正安国』を考える―復興の教化学構築のために」をテーマに、茨城県水戸市で開催した。二日目は、昭和32年わが国で初めて臨界に達した原子炉が誕生した東海村の施設を見学した。この会議の意図は次のように記されている。

東日本大震災は、私たちに様々な問題を提起しました、否、提起し続けています。この震災が「3・11」と呼ばれ、「エポック」（新たな紀元）として位置づけられるようにまでなったのは、マグニチュード9.0の大地震、各地に大きな被害をもたらした大津波（そしてその様を写した大量の映像による被災感覚の共有）もさることながら、福島第一原子力発電所の国際原子力事象評価尺度レベル7の過酷事故によるところが大きいと言えましょう。

今年の5月5日には、北海道の泊原発三号機が定期検査のために停止、日本全国で稼働している原発が存在しないという事態を迎えました。この夏の電力不足が懸念される中、原発の再稼働が大きな問題となっていますが、これは、国のエネルギー政策の在り方そのものの問題であり、換言すれば、私たちの生き方自体が問われているのではないのでしょうか。（開催趣旨）

基調講演は「3・11後の生き方を考える」と題して、内山節氏（哲学者・立教大学大学院教授）をお願いした。内山氏は次のように述べる。

私自身は、日本の社会はずいぶん変わり始めたというふうに思っています。

内山氏は日航機が墜落した上野村に「一応畑とわずかな山を持って暮らし」「仕事の都合もあって、上野村にいたり東京にいたりという生活を40年間ぐらい続けて」いる。ときおり行くフランスの社会観が人間だけでつくられているのに比べ、

日本の社会観は（略）、生きている人間と亡くなったかたと、それから自然という、その三つの構成メンバーによってつくられてきた

と分析する。そして、団塊の世代の人びとに比べ、今、若い人たちを中心にして日本はそのような伝統的な社会へ戻ろうとしていると、内山氏は思う。

今の若い人たちにとって、特に許しがたいわけで（略）ある意味では、われわれがみんなしてつくってきた社会が、いわば原発をたくさんつくらせるような社会であった。（略）その点では、私自身そうなんですけども、やっぱりこの世界に生きている人間としての、ちょっと厳しくいえば、共犯者としての自分といえますか、そういうものもどこかで感じている。

内山氏は、東京でも地震が起き、帰宅困難者がいっぱい出てきたとき、勤めている立教大学の学生のとった一つの行動に注目した。

おそらく自分の知っている限りののところに一斉メールを出した（略）ワンルームマンションに住んでいる学生（略）は、自分の住んでいるワンルームマンションと思われる場所が示してあって、それで、「どなたでもいいからお泊りください」



福島第一原発被災地警戒区域・JR富岡駅前（平成24年5月撮影）

という、そういうメールです。

内山氏は、「そうだ、僕のうちを解放しよう」と思い実行したこの学生の例をあげて、「利他的な生き方」が人びとの間に芽生え、

自分が生き残る経済ではなくて、みんながやっていける経済っていいですか、共に生きる経済、そういうものを模索する動きが（略）広がってきたという感じがいたします。

と、展望する。

内山氏が述べることは宮沢賢治が実現しようとした世界に通じている。東日本大震災以後、人びとは無縁社会をうみだした社会、原発を必要とする生き方が、はたしてよかったのかを問うている。そして、その輪はゆっくりと広がっているのである。

社会に広がるこのような静かな動きと、地域社会に根を張る寺院の教化活動は重ならないのだろうか。重ならないとしたら、なぜ、重ならないのかを、私たちは自らに問うべきではないのか。私たちの生き方はこれでよいのか、と。今、教化するものの生き方自体が社会から問われている。



第十八共徳丸 気仙沼市・JR鹿折唐桑駅前
(平成24年5月撮影)

「自分が生き残る」から「共に生きる」へ

利他的な生き方の理想の姿は大乗仏教における菩薩行でしょう。そして法華経常不軽菩薩品に「汝等皆行菩薩道 当得作仏」とありますように、実は成仏には菩薩行が必要なのです。

現実世界に眼を戻すと、人間は社会的な生き物であり社会や他人との関わりなしには生きていけません。であれば、その関わり方に個人の幸せも社会の幸せも大きく連関します。資本主義のシステムにおいて利潤の追求は当然の権利ですが、自分だけが儲ければよい、我が国だけが豊かであればよい、という強欲な感覚はそろそろ制御すべき時に来ています。

そこで大切になってくるのが慈悲。私もあなたも、そしてすべての生きとし生けるものは、儚い無常な存在であると知る。そこから、互いに憐れみ慈しむ心が自然と生じます。心に生じた、その小さな慈悲を忘れてはなりません。そしてその慈悲から、世界を少しずつ良くして成仏させていく。一気ににはできません。一度に改革しようとする、必ず思想統制や肅正・虐殺が行われるというのが歴史の教訓です。そうではなく、個人の心の中にある慈悲を具体的に少しずつかたちにしていくことが大切なのです。

とはいえ、自分よりもまず他人（自未得度先度他）の心で邁進するのは苦しいし、損をしたようではかばかしい。誰もが自己の感覚的快樂の享受と満足のみを目指すものです。けれども、いったんあなたが我欲を捨てて菩薩行に努力しているその間、実はあなたは仏なのです。誰かのために生きること。それは、時には自己犠牲をも伴いますが、苦難の末に成就できれば大きな幸福感が得られます。心の底から湧く暖かくて大きな満足感。生きていてよかったと心底思える晴れ晴れと輝く気持ち。自分は今この為に生まれてきたという深い確信。一度でもこのような多幸感を得たことのある人なら、人間の本当の幸せは欲求の充足や自己実現だけにあるのではない、ということが理解できるでしょう。誰かのために生きることのないまま生涯を終える人は不幸だと思いませんか。